



盛装したギャロンの家族写真(写真説明:19ページ)

中国四川省 2008年11月1日撮影
 四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問・大川健三

「わんりい」141号の主な目次

北京雑感その(32) 前門大街辺りの変化	2
私の調べた四字熟語(30) 公平無私	3
媛媛讲故事(11) 孟姜女の伝説	4
中国を読む(59)	
アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない恥辱のあまり崩れ落ちたのだ...	5
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より.....	5
台湾-美麗宝島④ 檜谷山荘の夜.....	6
四姑娘山・写真便り(16) 熱帯雨林に隠遁する“森の人”.....	8
中国旅行では漢方薬注射にご注意を!.....	9
私の四川省 一人旅(22) 亜丁IX	10
スリランカ紹介(26) スリランカ北部における紛争.....	12
写真集「カメラを通して見たスリランカ」.....	13
アフリカとの出会い(30) 毎日がクロスカントリー.....	14
中国・東北三省の旅(3) 聖なる山・長白山(白頭山).....	15
中国語で歌おう!会・3月の歌/「襟裳岬」中国語歌詞.....	16
四姑娘山山麓の地震復旧状況・報告	17
「わんりい」【活動報告】新年会	18
「わんりい」掲示板	19

♪♪「中国語で歌おう!会」3月の歌♪♪

jin shang jiǔ
 「襟裳岬」(歌詞、16p) 詞:岡田まさみ
 中文詞:林煌坤
 曲:吉田拓郎

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109 ファッションビル7F

3月13日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

● ご予約ください!

「中国で歌おう!会」4月の講座日は
 4月24日(金) 19:00~20:30 です

*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

今回、いつもの北京滞在とは別に、河南省安陽の殷墟・山西省陽城の皇城相府・山西省運城の関帝廟と死海黒泥浴・陝西省韓城の司馬遷祠と文廟(孔子廟)・山西省に戻って平遥の古城と元宵節祭見学・山西省太原の晋祠と双塔寺等を回る9日間の旅を経験しました。とても楽しい、内容豊富な旅行でしたが、これについては、また何時か機会があったらお話したいと思います。

この旅行の最初と最後に北京で泊まりましたが、私にとっては一年半ぶりの北京でした。新しく出来た北京空港に初めて降り立ちました。北京への出入りの度に、遠くで工事しているのを見ていましたが、完成した空港の建物を目の当たりにすると、その大きさに圧倒されました。話には聞いていましたが、桁外れに広くて、通関まで随分歩かされました。

第一日目の宿は、王府井書店の隣のホテルでした。空港から王府井までの高速道路は比較的空いていました。春節直後という時期のせいか、或いは世界的な経済不振のせいかと思いましたが、マイクロバスの運転手さんは、北京オリンピック後も引き続いて実施されている、自動車のナンバープレートによる運転規制のせいだと思っただけでした。月曜日から金曜日まで、毎日、ナンバープレートの末尾数字が二つ指定されて、走行が規制されます。土曜日と日曜日はどうなっているのか聞き損ないましたが、以前の北京では、まだレジャーで車を使うことは少なく、土日の渋滞はあまり酷くありませんでしたから、規制は必要ないのかも知れませんね。走るマイクロバスから見える範囲では、今回は町並みが著しく変わったというような印象はありませんでした。

ホテルにチェックイン後、王府井を散歩してから、夕食を予定している精進料理のお店に近い前門へタクシーで出かけました。王府井は北京の銀座と言えますが、前門は北京の浅草と言った感じで、庶民的な雰囲気と北京らしさが、多くの外国人旅行者を魅了してきました。それが、前回、私の北京滞在中に、地下鉄前門駅付近がすっかり掘り返されて、大改造が行われていました。折角の北京らしい街を、2008年のオリンピックまでに変えてしまうようでした。その後どうなっているのか気になっていたもので、ちょっと覗いて見ました。

タクシーで前門西路の大柵欄入り口まで行って、大柵欄を前門大街まで歩きました。道路は小奇麗になっていましたが、並んだお店にはあまり変化を感じませんでした。同仁堂という薬局を基準として店の前面を揃えたようで、少しだけ道幅が広くなり綺麗になっていました。大柵欄から地下鉄の駅へ抜ける路地は通りませんでした。覗いた限りでは、以前とあまり変わっていないようでした。変化が少ないのを見て、物足りないような、安心し



上は改修後の前門辺りをざっと纏めた地図です。改修前にはなかった前門東道、前門西路などが新しく開通し、天安門広場付近の渋滞の緩和が図られました。文中の地名の凡その位置関係を見て頂ければと存じます。

たような妙な気分になりましたが、次回はもう少ししっかりとチェックして見たいと思います。

前門大街に抜けると、町並みは完成していましたが、商売をしているところは少なく、殆どが開店準備の内装工事中か、まだ締め切り中でした。並んだ店構えは、灰色レンガで古風に作ってあり、随分前に、昔風に作り変えた琉璃廠^{注1}と同じような感じです。偽物とは言え、古い北京の雰囲気が残るようですから、近代的な町並みになって個性の無くなった王府井^{注2}の二の舞でないのは救いですが、此処にどんな店が入るのでしょうか？聞く所に依ると、従来の著名な食べ物屋さん他に、何軒か欧米のブランドショップが出店の権利を入札で得たそうです。前にも書きましたが、前門にブランドショップは似合わない気がします。浅草にティファニーが出店したら、皆さんはどう思われますか？

また、前門大街は車の乗り入れが禁止され、代わりに路面電車が走っていました。レトロな電車で、一応複線になっていましたが、6時過ぎのせいか、電車は2本の線路で同じ方向に走っていました。これも伝聞ですが、この電車は前門大街を1ブロックだけ走って、前門の古風な町並みに合わせて雰囲気を盛り上げるものだそうです。乗客をいくらで乗せるのか、どのようなタイムテーブルで走るのか、これも次回の課題です。もう薄暗くなっていたので、よく見えませんでした。前門大街の始点、正陽門の前に電車の方向転換用施設があるようでした。日中でしたら、いろいろ面白いことが見られるのではないかと、次の機会に期待します。

精進料理の老舗・功德林で楽しい夕食を頂いた後、他のメンバーは京劇観賞をされましたが、私は時間を貰って、北京の友人を尋ねました。往きはタクシーを使いましたが、帰りはバスと地下鉄で帰りました。オリンピックの前、北京市では、バスや地下鉄の乗客のマナー改善を熱心に行っていましたが、今回乗った限りでは、バスの車掌さんも、地下鉄の乗客も、マナーがよいとは言えませんでした。車掌さんは、乗客が質問してもあごで応えるような態

度でしたし、地下鉄の乗客は以前と変わらず、降りる人間を待たずに、我先にと乗り込んで来ました。

こんな北京を見て、何だか懐かしく思う自分がいて、妙な気分です。北京の人達があんまりお行儀が良いと、北京らしくないと思うのは、これは中国に対してちょっと失礼でしょうか。

注1) 前門大柵欄の西方に位置する、書画骨董街 2004年頃改修。
注2) 1998年頃、近代的な町並みへと大々的に改修された。

公平無私 (こうへいむし)

私が調べた四字熟語 30

三澤 統

「公平無私」という言葉があります。三省堂の現代国語辞典には、「公平無私：自分の利益などを考えることなく、まったく公平なこと」とあります。

仮に私たちがある組織に属していて、何かの役の人選を任されたとします。このような時には“公平無私”を期することが大切だと思います。でも気持ちでは公平に選ばなければと思っていても、実際には、ついつい自分に有利に事を運んでくれる人材や、自分が気に入っている人物を選んでしまうのではないのでしょうか。

しかし、そのような考えで選んだ人材なり人物が本当にその組織にとっての適任者かどうかは分かりません。また公平を欠いた人選ではその組織は旨く機能しない恐れもあります。

公平無私を口ではとなえても実際に行なうとなると公平無私に適任者を選ぶのは結構難しいことです。なかなか建前どおりにいかない”公平無私”ですが、どんな由来があるのでしょうか。

小学館 中日辞典でも、「大公无私(dà gōng wú sī)」①公正無私 ②公平である。えこひいきしない」とあり、この言葉の出典は「韓詩外伝」注です。

晋の平公が在位の時に南陽県で県知事が一人欠けてしまいました。そこで平公は大夫(古代の官職名)の祁黄羊に誰が県知事の職に向いているかとお訊きになりました。祁黄羊は「解孤がその任に向いていると思います。」と答えました。

平公はそれを聞いて大変驚いてたずねました。

「解孤はそちの仇ではないのか?そちは何故自分の仇を推薦するのだ?」

祁黄羊は答えて言いました。

「あなた様がたずねられたのは誰が知事を務められるかということで、誰が私の仇かをお尋ねになったのではありません」

そこで平公は解孤を南陽県の知事に任命しました。果たして解孤は南陽で民衆のために沢山の善政をしき、その政治的業績は突出していました。

しばらくの後、平公は祁黄羊に今度は朝廷軍に軍中尉を一人推挙して欲しいと頼みました。

祁黄羊は祁午が適していると考え、軍中尉に推薦しました。それを聞いて平公が尋ねました。

「祁午はそちの息子であろう、そちが自分の息子を推薦したことに他の者たちが不平を言うのが恐くないのか?」祁黄羊はそのようなことは意に介さないというように平然として答えました。

「あなた様は私に軍中尉を一人推薦するようにおっしゃられたのです。私の息子が誰かをお尋ねになったのではありません」

そこで、平公は祁午を軍中尉に任命しました。果たして祁午は祁黄羊の期待に背くことなく仕事のやり方も際立って優れておりました。

孔子はこの二つの話を聞き感慨を覚えて言いました。

「大変良いことだ、周囲の者を推挙するに仇をも避けず、身内の者を推薦するのに息子も含めて考える。祁黄羊は実に公平である。」

祁黄羊は人材を推挙するに当たって真にその人が適任と思われれば、仮にその者が自分の仇であっても排斥したりせず、また身内に対しても周囲の者の無責任な批判をも恐れずに推薦したという。これこそ公平無私の模範的なあり方と言えるのだということです。

注) 韓詩外伝：中国、漢代の韓嬰が著した『詩経』解説書。10巻。雑多な故事や説話をあげ、それらを『詩経』の詩句で説明したもの。詩句の解釈を主とした注釈書とは異なる。(Yahoo!百科事典)

中国にはよく知られた四大伝説があり、「孟姜女の伝説」はそのひとつです。

話は秦の時代に遡ります。江南地方のあるところ、孟という苗字の家の庭に瓜が一本植えてあり、その瓜の蔓が塀を越えて隣の姜という苗字の家の庭にも伸びてゆきました。秋になって瓜は大きく立派に実

りましたので孟と姜の両家で半分づつ分けることにしました。

ところが瓜を割ってみますと、とても綺麗な可愛い女の子がいました。孟家には子供がいまませんでしたので、孟夫妻はとても喜んで、女の子に「孟姜女」と名づけ自分たちで育てることにしました。

孟姜女は両親にそれはそれは可愛がられながら幸せに育ちました。そしてその後十何年か経ち、聡明で美しい女性に成長しました。

その頃はちょうど秦の始皇帝が万里の長城を建て始めたところでした。その為の労力が限りなく必要なため、役所はいたるところで労役に送る人を捕らえていました。ある時、範喜良という青年が危うく捕らえられそうになり、家から急ぎ逃げ出し、あちこち逃げているうちに知らずに孟家の庭に入ってしまった、そこで孟姜女に出会いました。

青年は真面目な書生のように見えたので、孟姜女は可哀相に思い、両親と相談の上、青年に孟姜女の家でしばらく隠れてもらうことにしました。

範喜良は大変礼儀正しく立派な青年で、学問もあり、孟夫妻はこの青年が気に入って娘婿になってくれればどんなにいいだろうと考えるようになりまし

た。そこで娘の孟姜女の気持ちを尋ねてみると、孟姜女もまた範喜良に少なからず好意を寄せていたのでこの縁談を纏めることにし、良い日を選んで、結婚式を挙げました。

二人の結婚生活はこの上なく幸せでしたが長くは続きませんでした。範喜良はまるでそうなるのが運

命であるかのように、結局役所が派遣した兵士に捕らえられ、遙か北方で万里の長城を造る労役に送られてしまいました。

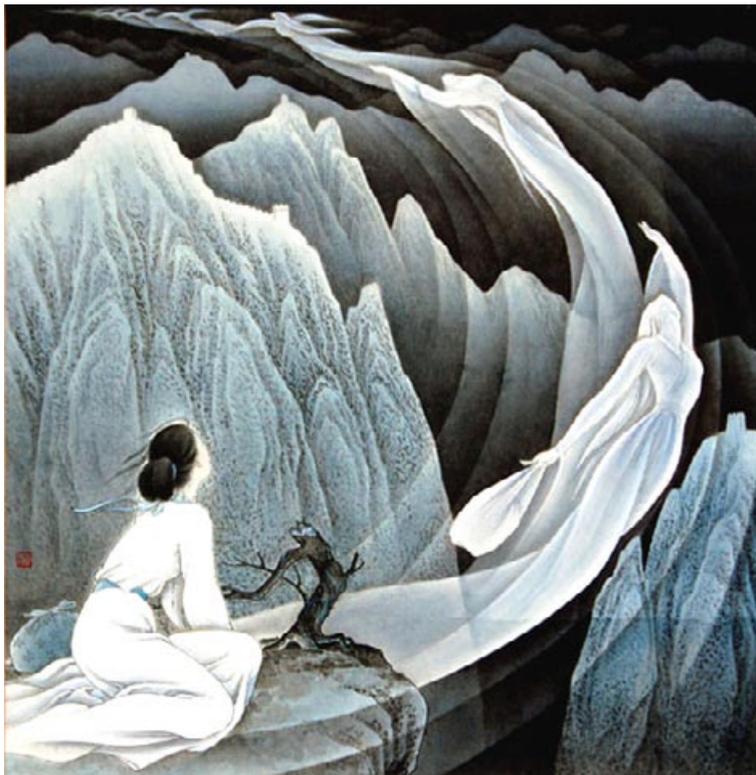
孟姜女は夫のことを思い、毎日泣きながらその後ずっとたよりを待ち続けましたが、一年、二年経っても夫からの音信は全くなく、その消息は何も聞こえてきませんでした。

孟姜女は夜も寝ずに冬の服を作り上げ、それを携えて万里の

長城の工事現場へ自ら夫を探しに行こうと心を決めました。

旅の道中、孟姜女は病気に罹ったり、悪人に虐められたり、疲労で倒れたりなど、108の苦難を乗り越えながら命がけで北へ北へと歩き続けて行きました。

(つづく)



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

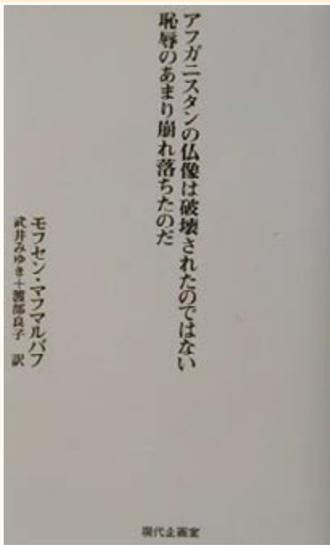
原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない 恥辱のあまり崩れ落ちたのだ

現代企画室

モフセン・マフマルバフ 著 武井みゆき+渡部良子 訳



世界には、こんな国がある。

- 5分に約1人が戦争や飢餓で死ぬ。
- 1分に約1人が難民となって出て行く。
- 1日に約2人が新たに地雷や不発弾の被害に遭っている。(毎月約58人・2008年3月現在)。
- 平均寿命は43.77歳。(2007年推計)
- 1歳未満の乳幼児が、100人中16.5人死ぬ。
⇒1クラス40人としたら、クラスの約6.6人が1歳

未満で死ぬということになる。

- 5歳未満の幼児が、100人中25.7人死ぬ。

⇒1クラス40人としたら、クラスの約10.28人が5歳未満で死ぬということになる。

この国は、アフガニスタンだ。

私の乏しい想像力では、ただ漠然と、この国では、死ぬこと、難民となること、地雷の被害にあうこと、小さな子どもたちが生きられないこと、それらがすべて「普

通」だと悟るだけだ。

なぜ、だろう。なぜ、これら「異常」なことが「日常」となりえたのか。

著者によれば、理由はいくつかある。例えば、代表的なひとつの理由。アフガニスタンには、世界資本主義のなかで、物々交換できるものがなく孤立している。管理された水源地がないなかでの農耕や、旱魃に脅かされる牧畜など、仕事は限られ、雇用機会は少ない。だからこそ戦争や密輸が貴重な雇用の機会として、ある。食べるに困った人々の「選択肢」として、戦争やアヘン取引が存在する。

しかし、一番大きな理由は、それではない。

著者は言う。すべての原因は、「世界を覆い尽くしたこの人類の無関心」だと。「世界の無知」が、これらの「異常事態」をアフガニスタンに押し付けている。

唯一、この凄惨さに耐え切れず声を上げた人がいた。それは、バーミヤンの仏像であったと著者は続ける。「仏陀は世界に、このすべての貧困、無知、抑圧、大量死を伝えるために崩れおちた」。しかし、世界は仏像のみに捉われ、その背後にある悲惨な国の実情には無関心であり無知であり続けた。

「世界」などと漠然とした言葉で濁してはいけないと思う。世界の無関心で無知な、私もその一人だから。

(真中智子)

松本杏花さんの俳句

余情残心障子の韻の暮れかぬる

píng shàn xiǎn shényùn
屏扇显神韵

yú qǐng cán xīn pǐnmíng yín
余请残心品茗吟

mùsè chíchí lín
暮色迟迟临

季语：暮色，春。按理说，暮色一年四季都有，但春天的暮色最美丽，故作为春天的季语。

赏析：品茗赋诗，本来就是文人雅士所好，我们可以想象出当时情景：日式房间里，几位诗友坐在榻榻米上，一边啜茶，一边赋吟。夕阳西下，暮色染红了西边屏扇的和纸，诗情未了，残留心中；茶香飘逸，沁人心脾。此情此景，烘托出寂静中的幽邃，暮色中的渊深，令人回未无穷，浮想联翩。

yú qíng cán xīn 「余情残心」より

梅一分光悦の美に触るるかな

méi bāo chū dìng zhānkāi
梅苞初定绽开

guāng yuè zhī měizhǎn fēng cǎi
光悦之美展风采

chéng chù wú xīn zāi
枅触吾心哉

季语：梅，春。

赏析：此首及以下五首作于京都光悦寺。梅花含苞初放，绽开一成。饱满的花苞和初放的花朵，象征着春天的勃勃生机。我们常赞美凌雪怒放的红梅，是因为那烂漫的花簇能激发旺盛的斗志。而这光悦寺中初开的梅花，却给人一种清冷淡泊的感觉。

■ 北大武山を往復

寝床のコンクリートにデコボコがあり、快適とはいえなかったが、一夜が明けた。小屋にいた登山者のほとんどは、朝日を迎えるため夜明けを待たず出発(早い組は午前1時)して、人の気配が無くなった。寝床を譲ってくれた高雄のグループは、まだ寝ている。彼らは山小屋の夜を楽しんで、山頂へは行かず下山するという。そういうグループは、ほかにも居て台湾らしい登山形式だと思った。

山頂目指して8時出発。大部分の荷物は小屋に置いてきたので、足取りは軽い。三人分の寝袋を広げて寝床を確保してきたので、帰ってからの場所取りの煩わしさは無い。

しばらく行くと、早くも下山する親子連れに出会う。問いただすと息子の調子が悪く、引き返したとのこと。

小屋を出てから1時間、樹林帯の山道をなおも行くと、巨木「神木」に出会った。これは、地図にしるしてあるし、写真で見っていたので驚かなかったが、それでも一見の価値がある。看板の説明書きによると「台湾ベニヒノキ、樹



神木の台湾紅檜(ベニヒノキ)
3枚の写真を継ぎました。

齢約800～1000年、樹高25m…」台湾の巨木は日本統治時代にかなり切り出してしまったので、残っているのは貴重だ。

山の上部では、夜中に雨が降ったらしく山道が濡れている。ひとつの涸れ沢の源頭にさしかかると、道端でお茶を沸かしているおじさんがいて、立ち話のあとお茶に呼ばれた。台湾の登山者はお茶沸かし用に小型のヤカンを持っている人が多い。一杯いただくと、ウーロン茶系の良い香りのお茶だった。茶会が終わると、お茶ガラは無造作に道端にうち捨てるので、これは何じゃと思ったが、台湾ではこうするらしい。まあ、葉っぱだから許されるのか。

姿がクロマツに似た台湾鉄杉の林と、細い

笹がかぶさる道を過ぎ、ちょっとした岩場を乗り越えると馬の背のような、主稜線に飛び出した。ここまで来ると、山の反対側つまり、太平洋側が見える。だがそちら側は雲海が広がるばかりだった。足元を見るとコケモモに似た赤い実を付けた植物があった。連れ合いがコケモモに違いないということで、熟したものをつまんで口に入れると、とても酸っぱい。レモンをかじった感じだ。

そこからは尾根伝いの緩やかな道となる。行く手をうかがうと上下する尾根が連なり、どれが山頂か分からない。1時間ほど緩やかな上り坂を行くと、ひょっこり、横木が一本欠損した鳥居が現れた。これは「高砂義勇隊」という、原住民で編成した部隊の働きを讃えた、顕彰・鎮魂碑である。祠の土台などの遺構があった。石碑には日本語で武勲を讃えた文字が刻まれ、「昭和十九年、高雄州知事、高原逸人」の署名があった。このような高みに石材を運ぶのは大仕事であったろう。この場所の地図での表記は「大武祠」となっている。付近は、ほどよい休み場になっており、すでに登頂済みの登山者たちが遅めの朝食を摂っていたりしていた。

「大武祠」をあとに登り降りする尾根路を進み、次第に高さを得て、約1時間後の11時30分、やっと頂上に着いた。頂上からは北方の山々が青く霞んで聳立し、台湾の空を切り分けていた。

山頂の露出した岩に、「一等三角点」の石柱が据え付けてあった。台湾の測量事始めは日本軍が手がけ、一等三角点の石材は小豆島産花崗岩で統一したという。

他のパーティーはすでに帰った後で、山頂は我々だけだった。記念撮影後、持ってきた携帯食で昼食とする。私は小屋を出た後はTシャツ一枚で歩いたが、山頂で休憩するとさすがに寒く一枚着込んだ。昼食が終わった頃に後続のパーティーも到着して、山頂はにぎやかになった。北大武山往復の標準的な登山日程は、我々のような3日行程だ



高砂義勇隊の「大武祠」、鳥居の横木が欠損している。今はお休み処となっている



山頂にて。張さんはここに何度登ったか覚えていないと言った。

が、小屋発で登頂し、登山口まで一気に降りる1泊2日や、健脚の日帰りも可能だ。登山者によって速さや、日程がまちまちなせいか、山頂には登山者の出入りが続く。

帰路は下りなので楽だ。のんびり歩き、15時30分に「檜谷山荘」へ帰り着いた。

■ 檜谷山荘で歓迎される

む。そして今日は土曜日、金曜の昨日に増して宿泊者が多だろうと少し憂鬱であった。ところが小屋に着いて覗くと、ゆうべの混雑から比べれば、ずっと人数は少ない。床に寝る人は無しだ。台湾登山事情の謎、金曜より土曜が空いている？ どうして？。

炊事場のベンチには、新たなパーティーが夕餉の支度中で、野菜を刻んだり、湯を沸かしたりのたけなわだった。私たちも、貧弱な夕食（日本から持参したレトルトカレー）を作るため、そこへ行くと、まあ、こちらへいらっしやいと、なんだか分からないうちに歓迎され、宴会の肴になってしまった。彼らは組織山岳会ではなく、社長がリーダーとなって取り仕切っている職場の登山同好会らしい。ここへ来た目的は今夜の宴会で、山頂には登らないという。

北大武山に日本人はほとんど来ないので、私と妻が日



台湾鉄杉(*Tsuga chinensis*)学名からするとツガの種類らしい

本人だと判ると、飲め、食べると供給の嵐。彼らのモツ炒めなどが美味しいこともあって、ずいぶんとつまみ食いをした。このグループも料理班はオトコ衆であった。担ぎ上げた大きな鍋と豊富な食材を使い、料理に専念していた。女性たちは団らんの主役で、おしゃべりの花盛り。



二晩目の宴会の様子。両手を挙げているのがリーダーの社長

食事になると、社長はほろ酔いのご機嫌顔でコーリャン酒の酒瓶を突きだし、妙なアクセントで「サケ、ケサ」と私に迫ってきた。こりやまずいと逃げ回れば、私の仕草がおかしいのか、とりまく台湾びとがケラケラと笑って喜んだ。

小屋の食事処は、小屋の軒下にあるテラスで摂る。テラスには透明樹脂の屋根がありその下に数組のテーブルとベンチが並べてあった。こうすれば雨が降っても濡れずに食事ができるし、昼間は明るい。機能的な作りで感心したが日本の山とは違い、大量の積雪が無いので(雪で潰れない)屋根付きテラスが取れるのだろう。夜のテラスでは何組ものグループが青い光の下で、それぞれ宴会を繰り広げていた。宴会は夜更けまで続いていたが、私と妻は適当なところで切り上げ、寝袋にもぐった。床の寝床は心地よく快眠の夜だった。張さんは、宴会の輪に加わって、彼女が寝に来たのは知らなかった。

夜が明けると、今日も晴れ。早立ちの人たちはすでに出発して、小屋はガランとしていた。宴会のみで下山する組は、まだ寝ている。張さんが持ってきた薬膳ラーメンで朝食。日本にはないタイプの味付けで、体によさそう。

7時30分出発。帰路はすべての装備を背負うので、再び大きなリックとなったが、「美麗宝島」の山に登った充足感で、疲れもなく10時前に登山口へ着いた。

ここで拙文のサブタイトル、「美麗宝島」について述べよう。台湾ふうには「美麗的寶島」というらしい。その昔ポルトガル人が台湾を海上から眺めたときに緑濃い島の美しさに感動し、「Ilha Formosa (美しき島)」と漏らした言葉といわれる。もちろん私が調べたのではなく孫引きだ。今では一般化して台湾の人も誇りを持って「美麗宝島」を使うようだ。観光パンフレットではよくお目にかかるし、「東京フォルモサ婦女会」という在日台湾女性の組織もある。

登山口から手配の四駆で高雄駅に戻り、台北行きの新幹線に乗った。私ら夫婦は友人を訪問するため台中で下車した。お世話になった張さんは台北に帰るので、台中駅でお別れとなった。次回は台中のことを少し紹介する。(続く)



樹を渡るオランウータンの母子



オランウータン兄弟 (地上へ降りて来た所に人に近づかれて不安そう)

■ マラリア蚊と吸血ヒルに脅えながらの感動

ここは赤道直下のボルネオ島東海岸に近い熱帯雨林。息苦しい位にムシムシした森の中を薦や小枝を掻き分けながら歩いていた。自然な環境に棲むオランウータンを撮るために来たのだ。

プーンと羽音を立てながら寄って来て顔や首に止まろうとするマラリア蚊を神経質に払う。血清が有るのでマラリアに罹っても大丈夫だがやはり怖い。案内役のレンジャーが時々 "Be careful!" と言いながら頭上の枝を指さす。ヒルが居る。全部ではないが、中に人や動物に吸い付く吸血ヒルが居て、気付かない内に皮膚に深く食い込み痛い目に会う。

今度はレンジャーが口に指を当てて立ち止まる。前方20m位先の樹上から数頭のオランウータンがジッと此方を見ていた。その姿は真にマレー語で言う“森の人”だった!

■ ボルネオ島のオランウータン

属名 *Pongo pygmaeus*。寿命は30歳位で、雌は5～11歳位の間に子供を一頭ずつ生み、5才位まで育てます。



キナバル山 (4100m) のピークの1つ

🌸 撮影メモ

1992年当時、成田からコタキナバルを経由してサンダカンまで2日掛かり(どちらの場所も太平洋戦争の激戦地として名高い)。

コタキナバル上空を通過する時、東南アジア最高峰のキナバル山(4100m)が見えます。

冬場は北東風による雨が多く夏場は雨が少ないそうです。ただ夏場と言えども晴れ間は少なく密林の中なので、薄暗い中での撮影を強いられます。

ボルネオ島(マレーシア/サバ州)の自然保護区にて

1992年8月&1993年5月

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります……<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>

●大川さんのホームページはこちら……<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>

<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>

中国旅行では漢方薬注射にご注意を！

漢方薬は、効き目はゆるいけれど身体に優しい薬として愛用される方も最近は多くなりました。しかし、薬は薬、漢方薬だからといって全てに安心は出来ません。最近、中国在住の友人から漢方薬の「双黄蓮」注射液について下記のような情報が届きました。中国では医者によっては漢方薬注射液が使用されることがあるそうですが、使い方を誤れば思いがけない事態が生じることもあるようです。中国国内でもインターネット上に警告が掲示されるなど問題になっています。中国旅行で体調を崩した時など気をつけてなければいけませんね。

+++++

12月24日朝、私(中国在住)の6歳になったばかりの息子が風邪気味のために近所の診療所へ行った所、漢方薬の双黄蓮を点滴注射されました。しかし1時間後に気分が悪くなって吐いたため点滴注射を中止しました。

更に直後の尿に血が混じり腹部や尿道が痛むため県立病院で超音波やX線検査した所、腎臓結石が有ると言われ、翌朝未明に大学病院に入院しました。そこで超音波検査した所、腎臓に結石は無く少し濁りが有るだけでした。大学病院では抗生剤とビタミン剤の点滴を日に2時間程度受けただけで、4日目には何事も無かったかのように退院し、自宅で1週間の休養後、尿検査して問題が無い事が確認できました。

ネットで調べたり大学病院の内科教授の意見で、この騒ぎの原因は双黄蓮の点滴注射の副作用だった事が判りました。(双黄蓮は副作用が少なくない漢方薬で死亡例も有るようです)教授からは、「双黄蓮を2度と使うな。安易に薬を使うな。点滴注射より内服薬の方が安全だ」と言われました。当地のトップレベルの医療機関と田舎の病院や診療所の間には、普通の疾病や薬に対しても医療レベルに大きな隔たりが有る事を思い知った次第です。

+++++

尚、インターネット上に双黄蓮注射液など漢方薬注射液について警告も掲載されています。下記は上海看護/上海市看護学会一隔月刊よりの要点です。

■ 双黄蓮注射液アレルギー反応(2007/11/06)

双黄蓮注射液は、スイカズラ¹⁾の蕾・コガネバナ²⁾の根・レンギョウ³⁾の果実を素材とする漢方薬で、抗菌作用があり、呼吸器疾患に良く効き、安全といわれていますが、使用範囲が広がるにつれアレルギー症状を招くケースが出始めました。

双黄蓮注射液のアレルギー反応は、通常は皮膚に発疹がでる症状として表れますが、アレルギー性ショック死の報道もあります。原因は、双黄蓮のスイカズラの蕾に含まれる緑原酸(クロロフィル)と異緑原酸(Isochlorogenic acid)が、抗菌・抗ウイルスに効果がある一方、アレルギー反応を引き起こす可能性によります。経口内服では分解・消化・排泄される成分が、注射液として直接血液中に注入されると、経口内服では見られなかったアレルギー反応が発生するようです。

一般的に、年齢が低いほどその発症率は高く、また高齢の患者にも発症し易いといえます。小児患者の器官は薬物作用に対して敏感で、薬物のアレルギーに対する耐性に乏しいからと思われ、中老年者は生理機能、器官代謝が減退し薬物に対する代謝や排泄能力の低下のため症状が出やすく重くなるようです。

過去の資料から、双黄蓮注射液によるアレルギー反応は、双黄蓮製剤を既用している場合は少なく、初めて使用する時に

発生するようです。また、その大半が薬液使用後30分以内に発生していますので、初使用時は、注射後30分を重視しなければなりません。

一方過去の報道によれば、双黄蓮注射液アレルギーの内23.3%の患者が薬物アレルギーの既往症を持っていることが判明しており、投与の際は薬物アレルギー経験の有無を詳細に訊く必要があります。

■ 常用漢方薬注射液の異常反応発生と看護対策(2007/11/06)

漢方薬注射液は臨床で広く利用されており、比較的良好な効果を上げていますが、異常反応も徐々に増加して来ています。文献に依ると、1975～2001年の間で、中国国内で異常反応を起こした漢方薬注射液は51種、計2600例に上り、双黄蓮・マムシ抗栓酵素・純開靈・葛根素・穿琥寧注射液及び処方タンジン等で発生しています。

漢方注射液による異常反応は主にアレルギー及び中毒反応で、軽微なものは患者に苦痛を与えるだけで済みますが、生命の危機に関わるほど深刻な場合もあります。

1. 漢方薬注射液の不都合な反応発生の原因

① 漢方薬中に毒性を含む成分が比較的多い

アリストロキア酸が腎臓小管壊死を引き起こすような、毒による副作用・後遺症・継続反応等。

② 薬物中の抗原成分と患者の個体差

マムシ抗栓酵素・純開靈注射液に含まれる毒素蛋白・水牛角・鹿茸エキス等の異性蛋白は抗原性を持ちアレルギー反応を起こし易い。アレルギー体質では時に薬物に反応し、深刻な事態を招くことがあります。また、純開靈注射液・双黄蓮注射液及びタンジン注射液等、注射後の強い副作用が発生したとの臨床報道もあります。

③ 漢方薬注射液の品質問題

漢方薬注射製剤の中には、品質に問題のあるものもあり、安全性に影響を与えることがあります。

④ 漢方薬注射液量及び濃度

漢方薬注射液は、往々にして規定薬剤量の100%～300%で製造され、勝手に増やした薬量が由々しい結果をもたらします。例えば高濃度タンジン液が心拍緩慢及び低血圧性ショックを引き起こしたとの報道もあります。

⑤ 使用過程の要因

- イ 誤用 皮下注射薬品を静脈に投薬される。
- ロ 薬物の相互作用 多種類薬物の併用は、薬物間の反応により問題発生率が高くなります。漢方薬注射液には多くの成分が含まれていますので、その中のある成分が薬の相互作用で治療効果を減退させることもあり、時には有害物質が生じ人体に不都合な反応を起こしたりします。
- ハ 投薬方法 投薬方法により薬物間反応を生じ有害物質が生じることがある。(以下省略) (田井)

(web記事の翻訳：有為楠)

なお、日本では「双黄蓮」は承認されていないので、発売されていません。国内で医師の処方漢方薬服用の場合は心配ないと思います。あくまで中国国内での注意です。

注：日本での生薬名

- 1) 忍冬(ニドウ)
- 2) 黄芩(オウゴン)
- 3) 連翹(レンギョウ)

私の顔を見つめ返した青年が「アッ・・・！」と叫んだ瞬間、私の頭の中はパチーンと火花が散って真っ白になっていた。自分でも何がなんだか解らないうちに肩にかけていたザックを地面に放り出し、ダッと青年に駆けよると体当たりするような勢いで彼の身体にギュツと腕を巻きつけていた。

「やっぱりあなたなんだね!!! とっても会いたかったよ～!! 亜丁の事を思い出す度に、いつもあなたの事を想ったの!! もう会えないかと思ってた～!!!」

身体を離すと一気にそこまで喋ったところで、少し冷静になってきた私は急に恥ずかしくなってしまった。あまりに思いがけない再会の喜びに我を忘れて抱きついたりしてしまっただけ、彼はもうあの時の子供ではなかったのだ。やんちゃで腕白な人懐っこい少年は三年の間に背丈も伸びてハンサムな凛々しい青年に変わっていた。

ちょっとドギマギしながら慌てて傍で様子を見ていたウィンに彼を紹介すると、私はズボンのポケットに入れっぱなしの手帳を取り出し、彼が自分の名前を書き入れたページを開いてみせた。

「これ覚えてる!? 三年前にあなたが書いたんだよ」

彼の拙い筆跡で「四郎旺堆」と書かれた横には、私の字で「スラワンドウイ」と仮名がふってあった。

「アハハ・・・、俺の字はずいぶん上手だね」

「この時あなたは13歳だったんだよね? だから今は16歳でしょう?」

「俺は今18だよ」

あれれ? それじゃあ計算が合わないじゃないか。

あの時出会った少年が13歳だと聞いていたのは私だけではなかった筈だ。母が帰国後に作った旅のアルバムにも、一緒に旅行したKさんが後にわんりに寄稿された亜丁の旅日記にも、ちゃんと「亜丁で出会った13歳の少年」と書き込みがしてあった。

何だか合点がいかなかったが、本人が18だと言っているのだから間違いはないだろう。確かに目の前に立っている青年は、16歳にしてはもう少し大人のような気もするし、一般的に僻地の貧しい土地の子供達は体格が小さく幼く見えるので、私達が勘違いしていたのかもしれないし、チベット式では歳の数え方が違うのかもしれないし、彼が中国語を言い間違えたのかもしれないし、まあそんな事はどうでも良かった。美しい思い出の中の「幻の少年」として記憶の奥底に刻み込まれ、二度と会う事はないのだろうと思っていた少年と、あまりに突然にあっさり再会できてしまったのだ。

まったくなんて偶然だろう。ここに来るまで旅行者を乗せた騎馬隊の一群とは何度もすれ違ってきたが、その中に彼が混じっているなどとは考えていなかった私は、この時まで馬方の顔に注意を向けたりなどしていなかった。もしこれが歩いている時だったりしたら、荷物の重さにバテ気味の私は歩く事に精一杯で、旅行者を乗せた騎馬隊などに興味を引かれることもなくすれ違っていただろう。

亜丁に到着して以来の不愉快な出来事の数々で、ここに戻ってこない方が良かったのかもしれない、亜丁は美しい思い出のまま記憶の中にしまっておいたほうが良かったんじゃないかなどと沈みかけていた気持ちが、少年に再会できた喜びで大きく弾んでいた。

「今、どこに住んでいるの!? あの時の写真を送りたいけど住所が判らなかつたの」

私の問いに、青年は意外にも現在は成都で勉強しているのだと答えた。

「ええ～!! 成都!?!」

「今は夏休みだから亜丁に戻っているんだ」

私の手帳に新ためて書き込まれた名前と住所は、三年前とは見違えるような違筆だった。

ウィンも交え、暫く話しているうちに青年が言った。

「もうそろそろ行かなくちゃ。一応仕事なんだ」

「また会えるかな?」

「俺は亜丁村に住んでいるんだ。村に来てくれれば必ず会えるから、亜丁を発つ前に村に遊びに来て」

「どうやってあなたを探すの?」

「村で俺を知らない奴なんていないさ。きっと亜丁村に来てよ!!」

彼は手を振ると、とっくに見えなくなってしまった騎馬隊を追いかけて小走りに去っていった。

青年が行ってしまうと、あまりに突然の出来事がうそのように思えてくる。

本当に彼はあの時の少年なの!?

再会できた事がものすごく嬉しかったが、同時に現在の彼が既にあの時の少年ではなくなっている事が、ほんの少し寂しくも感じられた。三年前の思い出が強く心に刻まれていた私は、無理な望みだとは知りながらもやっぱりあの時の少年に会いたかったのだ。

彼の方はさぞかし驚いた事だろう。突然、行きずりの旅行者に睨み付けられ呼び止められたと思ったら、いきなり飛びつかれてしまったのだ。

三年前私が少年と一緒に過ごしたのは、たった二日間の

うちの数時間だけだった。いくら思いがけない再会だといっても、我を忘れて抱きつくほど特別な関係でもなかったし、彼にしてみれば私など毎年大勢訪れる観光客の一人に過ぎなかっただろう。あの場で驚いた青年に飛び退かれでもしていたら、私の面目は丸つぶれになるところだったが、彼はそんな私に動じる事なく体当たりしてきた私をちゃんと抱きとめてくれると、一緒に再会を喜んでくれた。やっぱりチベット族の男は肝が座っていてカッコいいのだ。

人懐こい彼の性格からすれば、親しくなった旅行者とハイキングに行く程度の事は、そうめずらしくもなかっただろう。それを思うと彼が私の事をちゃんと覚えてくれたのが嬉しかった。

それにしても・・・懐かしい友人との再会はこれまでも何度か経験したが、こんなドラマチックな再会は初めてだ。美しい大自然を背景に、思いがけない出会いの喜びに思わず駆け寄って抱擁をかわす二人・・・まるで映画のシナリオみたいじゃないか。三年前の湖畔に次いで、又しても私の人生史上に残るロマンチックだ。

そしてこの時、やはり私は思ってしまったのだ。

ああ～！せめて私が20代だったら・・・彼に抱きついたってもっと絵になったのに～！！

先ほどまで杖に頼ってヨロヨロと歩いていた私は、思い出の少年と再会できた喜びにすっかり足どりも軽くなっていた。今日の目的地である洛絨牛場はもうすぐだ。前方にはバームクーヘンの断面を思わせる年輪のような筋が幾重にも入った岩山が見えてきた。

うわ～！こんな山もあったよね～！！懐かしい～！！

そうだ、すっかり忘れていたが、この山も亜丁の風景の中で印象深かったものの一つだ。いったいどうしてこんな不思議な模様の山ができたのだろう。様々な堆積物が少しずつ重なって岩となった土地が隆起したのだろうかと思えたが、並んでいる隣の山には筋模様など付いていない。

地質学など普段はそれ程関心のない私でも、この辺りの土地の成り立ちは興味深く思えた。亜丁の山は標高が高いため樹木などは殆ど生えておらず、むき出しになった山肌がはっきり見て取れる。青い岩山の隣には赤い岩山があり、鬼ヶ島を思わせるトゲトゲ岩山の隣にあるのは普通の岩山だ。同じ場所に並んでいても、それぞれの山様が違うのが不思議で面白い。できることなら地質学者のような人に同行してもらい、土地や山の成り立ちを一つ一つ解説してもらいたいものだ。

そんなことを思いながら歩いているうち、いよいよ洛絨牛場の景色を代表する霊峰「央邁勇」の氷河から溶けて流れ落ちる三条の滝が遠くに見えてきた。

時刻は午後遅くなり、そろそろ夕暮れが近づいていた。少年と出会えた喜びで忘れかけていたが、私達の今夜の宿がどうなるかはまだ決まっていないのだ。風雨がしげる場所さえあれば、最悪、野宿もいとわない心づもりでやってきている私は、何とかなるだろうと思っていたが、ウィン是不安そうだった。

青年の話では洛絨牛場に宿はあるとの事だった。しかしその後道で会った土地のおばさん二人組みは、もう宿は閉めているから泊まる事はできないと言う。そして道端の畑の向こうに立っている納屋のような小屋を指差すと、あそこはウチの小屋だから一人10円で泊まらせても良いと営業までされていた。

「あ～、牛場に行っても無駄だよ。一週間前に宿は閉めたんだ。私の小屋を貸してやるから泊まりなさいよ」

これは沖古寺の宿の女将と同じセリフだ。もう誰の言ってる事が本当なのかもわからない。しかしここまで来たら、私は洛絨牛場まで行かない事には気がすまなかった。

おばさん達には牛場まで行って宿が無かったら戻るから、と言い残して再び歩き出す。しばらくして今度は徒歩で下ってくる若い中国人旅行者のグループと出会った。やはり正確な情報は旅行者同士に限る。牛場から下ってきた旅行者なら宿の状況についても知っているに違いない。私とウィンはすかさず彼ら呼び止めた。

「你好!! ねえ、牛場に宿はある!？」

「もう閉まっていて泊まれないの」

先頭を歩いていた女性が答えた。

やっぱりそうなのか～。予想していた事とはいえ少しガッカリした。

「人はいるの?」「いるけど、泊めてくれないのよ!」

「お願いしても?」

「駄目なのよ!! この人間って全然親切じゃないのよ!」

「じゃあ宿はないの?」

「ない事もないわ、土地の人が泊まらないかと言ってくるから」

泊まれる場所があるのか無いのか、なんだか曖昧な様子だが、やはり牛場の宿がシーズンを終えて閉まっているというのは本当の話だったのだ。しかし宿の小屋番がまだ居ると言うのなら、何とかなりそうじゃないか。先ほどの彼女はああは言ったが、日暮れ間際に女性が路頭に迷っているのだ。宿代だってちゃんと払うし、御願すれば小屋の片隅くらいには泊めてもらえるだろう。

大丈夫! 何とかやるよ～!

私はいつものように楽観的に考えをまとめると、もう目前に迫っている懐かしい洛絨牛場にむかって歩みを進めた。

(4月号に続く)

1月号に載せて頂いた「ジャフナ珍道中」の原稿の中でLTTEについて少し触れましたが、実はこの原稿を書き始めた昨年11月末から本年2月初旬にかけて、スリランカに関わりのある者にとって最も懸念されていたスリランカ北部での政府軍とLTTEとの戦いに大きな変化がありました。

この機会にわんりい会員の皆さんにLTTEについて説明させて頂こうと思います。大変に申し訳ありませんが、「ジャフナ珍道中」の続編は次号から再開させていただきます。先ず、スリランカでは全てのシンハラ人(国民の約73%を占める多数派で仏教徒が多い)とタミール人(同18%の少数派でヒンドゥー教徒が多い)が二手に分かれて人種抗争を行っているのではないかとスリランカ全土(北海道の80%程度の面積)に紛争が広がっているのか?この様な印象を持たれているかもしれませんが、大部分のシンハラ人とタミール人達はムーア人(約8%でイスラム教徒が多い)をも含めて仲良く暮らしている事、LTTEが全タミール人を代表する唯一の組織ではない事、を頭に入れて頂ければと思います。

これまでは北部地域の他にコロンボ市内でもLTTEによる官庁施設や軍事施設を狙った大規模な攻撃、要人を狙った人間爆弾による自爆攻撃などが頻繁に行われ、東部海岸地域や南部地域でも散発的なゲリラ攻撃がありました。小規模なテロを除いて最近の主戦場はLTTEが分離独立を求めている北部地域でした。「ジャフナ珍道中」はこの北部地域を休戦中に横断した時の話です。

LTTEの正式名称はThe Liberation Tigers of Tamil Eelam(タミール・イーラム解放の虎)で、その頭文字をとってLTTEと呼ばれています。LTTEは分離独立を掲げる極過激な反政府勢力で、1980年代初頭から活動を始め最盛期には5万人の兵力を持ったと言われていたのですが、2月初旬のスリランカ政府の発表では残存兵力は僅か2千人とされています。

タミール人側の立場とシンハラ人側の立場から考えるのとは異なった見解になるので書くのを躊躇するところではありますが、国内紛争の起きた背景についても簡単な説明をしておきましょう。

タミール側に独立運動が持ち上がった理由の一つには、競争をあまり好まないノンビリしたシンハラ人に比べて、後からスリランカに来たタミールの方がシンハラ人に追いつくために猛烈に勉強し、更に印僑と呼ばれるほど商才があった事が挙げられています。

英国からの独立後は医者や弁護士などをタミール系が占めたり、ビジネス界でもタミール系の方が成功者や裕福な人が多かったです。アジア各国である中国系やタ



スリランカ北部及び東部の大部分が含まれた、LTTEが要求する領土の模型。スリランカ北部の各所に敷設されている。

ミール系住民への苛めと同様の事がスリランカでも起こりました。一時期はシンハラ人によるタミール人狩りが公然と行われ、1970～80年代にはかなりの数のタミール人が虐殺されたと言われています。

他にも、タミール人は英国植民地時代にプランテーションの労働者としてインドから強制的に連れてこられて、英国人に使われていたシンハラ人現場監督から虐げられていた積年の恨みが爆発したという説、「ジャフナ珍道中— I」に書いたジャフナ王国の領土はもともとはタミール人の領土なので返して貰うだけという説、宗教上の問題という説等があります。もちろん、シンハラ人側にも紛争に導かれた筋の通った理由が存在します。印僑式の商売がシンハラ人の商売に合わない、同じスリランカ国民なのに国土を分割しようと企てる事は容認できない等です。

このような背景のもとに紛争が続いてきたのですが、冒頭にも書きました様に最近になって大きな変化がありまし

た。2月6日の政府軍の発表によれば、スリランカ北部にあるLTTE支配地域の首都とも呼べるキリノッチが1月初旬に制圧され、2月初旬には軍事上の重要拠点であったムラティブが制圧されました。LTTEの残存兵力約2000人は、地域の住人約25万人を「人間の盾」として人質に取りジャングルに潜り込んで、抵抗を続けています。人質とされている住人の大多数はタミール人なので、LTTEはタミール人社会からも浮いた存在になっています。

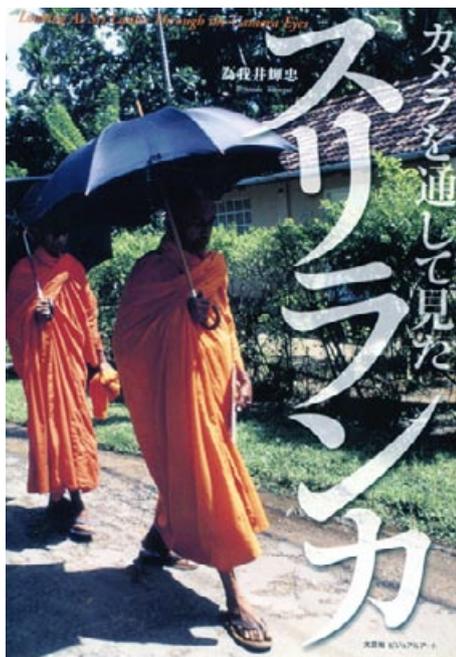
外国人の立場から見て、一方が正しく、もう一方が悪いと言うのは難しすぎることです。僕がどちらかが正しいと

言ってしまうと、それが一人歩きしてしまいそうなので、興味を持たれた方には勉強して頂いて独自に判断してもらうのが良いと思いますし、この問題はスリランカ人によってしか解決できないと考えています。

シンハラ系の人達ももともとはインドから来た人達で、タミール系の人達は少し遅れてインドから来た人だと考えれば、兄弟喧嘩のようなものだとも考えられます。しかし、どんな理由があるにせよ戦争は愚かな行為です。数千年の間に歪んで硬く絡まってしまった感情の行き違いを早く解き放してもらいたいと切に願っています。

∞※∞※∞ 写真集・カメラを通して見たスリランカ ∞※∞※∞

1999年に発足以来、日本とスリランカ間の友好と文化交流に寄与しようと活動を続けている「日本スリランカ文化交流協会」代表の為我井輝忠さんが、スリランカで撮りためた写真をまとめて、今年1月末出版しました。現在、久美堂本店と町田西友7Fリブロで発売中です。定価：税込み1050円 問合せ：☎042-735-9583 為我井輝忠 尚、為我井さんは、2007年12月から2008年12月かけて「大連便り・日本語教師雑感」を9回のシリーズお寄せ下さり、‘わんりい’の皆様にも親しんで頂きました。



【カメラを通して見たスリランカ】を出版して

為我井輝忠 (日本スリランカ文化交流協会・代表)

スリランカに行くようになってもう20年近くになります。行くたびに相当数の写真を撮ってきました。

私がスリランカで写真を撮る理由は、30年来この国ではシンハラ人とタミール人との民族紛争が絶えませんが、そこに生きる人々の生の姿を撮りたいと思ったからです。

どのような中であっても人々は笑顔を決やさず、行く度に私を快く迎えてくれました。そのような人々に私は心惹かれました。彼らを撮るのが大きな目的となりました。同時に、スリランカには豊かな自然があり、そこに生きる人々と同様に、スリラン



カの大自然は私にとって大変魅力的な対象です。紅茶畑、山岳、滝、湖、海、動物、教会、寺院等々、写真を撮る対象はどんどん広がりました。スリランカで写真を撮るのは楽しみです。

今回これまでの集大成として『カメラを通して見たスリランカ』を出版しました。多くの方々にスリランカを知っていただくだけでなく、私が見たスリランカの美しさとその国の現実を知ってもらえればと希望します。

写真集掲載の写真より

- ①モスレムの子供たち (コロンボ市内で)
- ②伝統的なキャンディアン・スタイルの結婚式
- ③象の背に仏陀の聖遺物をのせて街中を練り歩く (キャンディのペラヘラ祭り)



アフリカとの出会い (30) アフリカの日々「毎日がクロスカントリー」

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

「ニャフルル (Nyahururu) という所へ旅行に出掛ける。ナイロビからバスで2時間から3時間。中央ケニアの一番肥沃な大地、いい気候の場所。当然そんな土地はイギリス人入植者が見逃すわけも無く、今でも入植者の3, 4世が多く住む地域の一つだ。

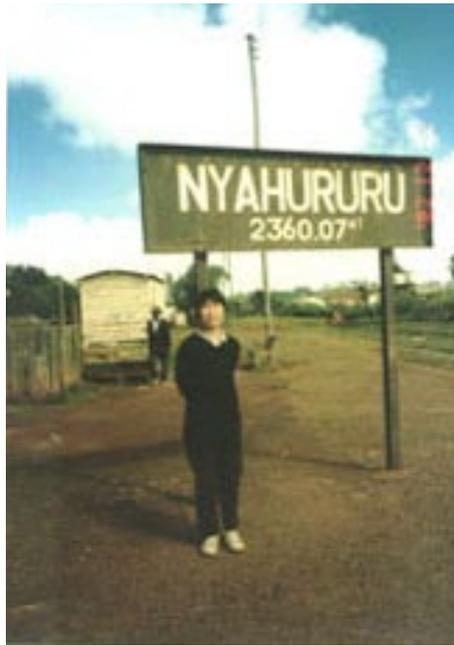
ここに入る前にニエリという地域で一番大きな町を通る。ここもイギリス人が現在も多く暮らしており、ちょっとしたヨーロッパのような町並みで、白いビクトリア調の建物に、ケニアのピンクのブーケンビリアの花が生き茂っているのを見ていると、どこにいるのか分からなくなる。

目抜き通りにはいろいろなお店が立ち並び、ナイロビの町とは違って少しゆっくりとした時間が流れている。カフェがあり、古本屋があり、アンティークショップがあったりして、イギリスの文化が感じられる場所でもある。ケニアの人にしてみたら感じたくはないのかもしれないが、ケニアの植民地であったことの歴史の産物のような気がして、私は歴史を感じながらのんびりと買い物を楽しんだ。ふっと入った古本屋の店主もイギリス人だった。

彼はちょうどティータイムを楽しんでいたらしく、私も紅茶をご馳走になった。ケニアでは、ミルクティーが一般的。しかし、彼は、新鮮なケニアの茶葉を使ってストレートティーを楽しんでいた。

イギリスで売られている紅茶は、イギリスの紅茶会社がケニアで生産し、輸出しているもの。それを本国で美しくパッケージし、他の茶葉を混ぜたり、香りをつけたりして付加価値をつけて本国や海外に輸出している。ケニアの茶葉は、工場でランク付される。1番と2番の高品質のものは海外へ。3,4番は混ぜる目的で買う国々へ。5,6番は「ダスト」と呼ばれ、茶葉ではなくほとんど粉に近い状態のものは、ケニア国内へ。一番良いものは、海外へ。一番悪いものは国内へ。売り値段の差とはいえ、イギリスは今でもケニアの人々の暮らしに影響しているのである。

そんなニエリという町を後にして、「ニャフルル」に向かう。ここは、世界で活躍するマラソン選手の出生地として有名な町だ。バスを降りたとたん、坂道の急さと多さに驚くと共に「空気の薄さ」に気がついた。少し歩くと日本人の私としては息が上がって、おしゃべりを続けることが



少ししんどい。標高を調べてみると、2360メートル。ケニアの人も観光にくるニャフルル。穏やかに降り注ぐ太陽とさわやかな風が気持ちいい。

私は道を歩きながら、どうしてイギリス人入植者はここに住みたかったのだろうと考えていた。水が他地域に比べ豊富。農作物の収穫も豊かである。私はイギリスのどんよりした空を、長い冬を思い浮かべていた。それに比べればこの溢れるばかりの太陽の光は、宝物の様に見えたのだろう。本当にキラキラと眩しい太陽の光で溢れている。

坂道に疲れを感じていると、前方から歩いてきたロバに荷台をつけた老人にすれ違う。

—「私を運んでもらうと幾らですか？」と私。

—「君は何キロあるの？」と老人は笑う。

—「それは秘密だけど」というと。

—「大丈夫。お金は君の持っている中から適当に払ってくれればいいよ。どうぞ」と言ってくれた。

ロバの荷台に揺られながら、どんどん坂を上がっていくところには、トムソン滝 (Thomson Fall) という名の滝があった。この滝を見下ろすような高台に着いた私は、「滝の下まで行けるよ」という地元の人の言葉に従って崖を下り始める。観光地化されている場所ではあるものの、トレッキングの格好が必要と感じるほどの崖である。ごつごつした岩を上がったり下ったり。現地のアフリカ人はすいすいと崖を降りていく。遠くに音だけ聞こえる滝の水しぶきが顔に当たる。30分ほど一心不乱に、身の危険を感じつつ歩く。しかし、本当の身の危険は滝に着いたときにあった。

「カバ」がいたのだ。学校の教室の半分くらいの大きさのカバが滝つぼから出てきたのだ。

カバといえば、草食にも関わらず、身を守るため人間を殺すことでケニアの人は恐れている。滝の水しぶきで顔がびしょびしょになる。滝にはいくつもの虹がかかり、幻想的な景色の中、カバが1頭、2頭、3頭と確認できた。

野生のカバは生命力にあふれ、水陸両用な彼らは、すいすいと水の中を移動したと思いきや今自分がいる崖の所まで上がって来れるのだ。静かに、帰り道を急ぐ。自分の心臓の音が聞こえてきた。直感的に「殺されるかもしれ



ない」と感じた。振り返らずに来た道を夢中で戻った。途中、カバの「うおー」という声を聞いたが、振り返らずに進んだ。ほうほうの体で上にたどり着き安全を確認した時は汗がびっしょりだった。

滝の周りには何軒かおみやげ

もの屋さんがあり、カバの木彫りやキーホルダーなどいろいろ売っていたけど、思い出したくない思い出になったので買うのはやめた。少し歩いて、ホテルのティールームに入った。オーナーはイギリス人。美しい建物と花の数々。おいしい紅茶に魅了される。イギリス式アフタヌーンティーも用意できるとのこと。

いろいろ巡っているうちに、坂が多いこともあるが、とても疲れているのを感じた。空気が薄いせいだろうか？し

かしすれ違う下校途中の子供たちは走っている。はだしの子ども居る。しかも全力疾走に近いスピードで駆けていく。追いつけない私は、後ろから声を掛けた。

「何で走ってるの？」私は聞いた。

「家のお手伝いを早くしないと、日が沈むので勉強(宿題)の時間がなくなるから」

ケニアでは、電気がない家が多いので、日が沈んでしまうと暗くて勉強が出来なくなる。しかもどの子供も下の子の世話や家の仕事を手伝っていて学校から帰ると仕事が盛りだくさんののだ。お昼休みに昼食に帰る子ども多数いるらしい。一日2往復。ケニアの小学校は、6歳から始まり8年生までであるので、8年間はこうして登下校の度に走っているのだ。しかも、1, 2キロの子もいれば、なんと8,9キロもの道を走って学校に来る子供もいるとのこと。

「ケニアなぜ彼らは早いのか？」(忠鉢信一著/2008年/文芸春秋社)という本がある。人はケニアの陸上選手は遺伝子が違うというけれど、その遺伝子とは何なのかを調べた本である。結果、そんな遺伝子は今のところ見つからない。だとすれば、子供の頃から毎日坂道を、駆け足で走り続けることで培われた才能、環境こそ彼らを世界一の陸上選手にしているといえるのではないかと考えてくる。

中国・東北三省の旅 >>>3>>>

聖なる山、長白山(白頭山)へ登る

嘉陽ひろこ

集安から通化へ戻り、ここで白河までの夜行列車の手配をしてもらった。怪しげな若い旅行社の社員は俄高句麗研究者(?)の私の、さらに上に行く研究者で、筆記用具を片手に少々訛った北京語でしゃべり始めたら止まらない・・・。

Eは列車の時間とまだ手元に届かない乗車券を心配している。遼寧省瀋陽から一緒だったドライバー姚さんとは、ここで別れる。お世話になったお礼の手紙を、昨夜辞書を引きつつEと書いた。姚さんのお勧めの“通化ワイン”、ラベルに干紅の2文字のあるワインを探して手紙と共に渡した。すっかりお世話になった。私たちの片言の中国語をしっかりと聞き取ってくれ、小食のEの食事形態を覚えて、スープと野菜たっぷりの惣菜を必ず注文してくれた。彼との出会いに心から感謝する。

乗車券は届かず、やきもきしている私たちを促してその旅行社の社員は通化駅へと入って行く。手数料と乗車料を先払いした私たちは、彼の行動を怪しみながら、不安が胸に広がっていく。中国の列車手配のシステムは本

当にわからない。

「ちゃんと手配で・き・て・ま・す」

「手配するのは大変なんです」

「私の顔で手配できてます」

「今、乗車券はありません」

えーっ!!! 一体何が言いたいのか? どうでもいいから早く火車票を渡さないよ～!

「この列車は満員です。この席は、乗務員の席で、私が交渉して取ってあげました」

お礼を言えというのか? この野郎! 更に手数料をよこせ! とでも言ったら、おとなしい私たちでもしまいには怒るよ! と声にならない怒りが顔に出た頃、列車は出発した。寝台車両の一段目に私、三段目にEがそれぞれ落ち着いたが、翌朝白河駅到着の頃はEの憔悴した顔を見ることになった。扇風機が止まり通化から白河までの7時間余り、暑くて暑くて汗だくで一睡もできなかったそう。私の方は窓が壊れて閉まらず、風が吹きつけて寒かったのだが・・・。

吉林省白河駅で私たちを待っていてくれたのは、朝鮮族の女性ガイド朴さん。延吉市から夜中にドライバー氏と二人、ワゴン車を飛ばして列車の到着時間に間に合わせたそうだ。私たちはまず駅近くのホテルで朝食を摂る事にした。ここから更に1時間ほどワゴン車に揺られて長白山の麓へ行く。

長白山登山には、早朝が一番いいと、朴さんは長白山のゲート前、Eと私を先導してたくさんの人垣を掻き分けながら進む、ややこしい入場料、乗車料のチケット購入の長蛇の列も、ものとせず朴さんはすり抜けてゲットする・・・。バスに乗り、更に運動員村駐車場で四輪駆動車(トヨタのランドクルーザーが多い)に乗り換え長白山の頂上にある“天池”を目指す。

長白山(韓国・北朝鮮からは白頭山という)は北朝鮮との国境の山だ。吉林省延辺朝鮮族自治州安図県を中心にした自然保護区に指定されており頂上に天池と呼ばれるカルデラ湖を有する。標高2691メートル、天池の北半分が中国領、南半分は北朝鮮領となり韓国人観光客は、中国側から“壇君神話(朝鮮族誕生伝説)”の聖なる山に登山することになる。

四輪駆動車の猛スピードに身体を右に左に揺られ、お尻は厭というほど座席を打ち、それでも悲鳴を抑えながら、舗装されているとは言え、落ちたら一溜まりもない絶壁を駆け上る。すれ違う相手の車もスピードを落とさない! Eも私もガイドの朴さんにしがみつき両手の力も尽きたころやっと到着した。

山頂の少し手前の駐車場からは、徒歩で天文峰という見晴らしのよい山に向かう。もはや頂上には、人だかりができています。そこを目指す人々の蟻の行列もできています。朴さんに引きずられながら、私たちも一步一步登る。見えた! 岩と岩の間から、青い色の美しい湖が・・・。

絵はがきやガイドブックの色とも違う! 神秘的で深く透明感のある青だ! 霧が立ち込め、また晴れる。真っ青の空と群青の湖。長白山十六峰が天池を守るかのようにぐるりと囲み、時折、鳥が両翼を広げて何処へか飛んでいく。天池と書かれた石碑があった。“1983年 鄧小平”と刻んであった。天池の青に堪能した私たちは、再び四輪駆動車に乗り、ジェットコースターの乗り心地に辟易しながら、運動員駐車場へ戻り、そこからバスで“長白瀑布”の山門へと向かった。

下車すると右側に長白温泉の水色の建物が見える。朴さんが日本と同様の温泉ですよ、入浴してみますか? と誘ってくれたがEと私は首を横に振って滝へいきましょう! と応えた。

途中、温泉の湯で作ったゆで卵を販売している処を通り、橋を渡り、遠くに三筋の滝が見えてきた。天池の天文峰と龍門峰の間から流れ落ちる水は落差が68メー

ルあり東北部最大の滝であるという。雪解け時の水量が最も多く登山道にも水しぶきが飛んでくるそうだ。第二松花江、鴨緑江、図們江の三つの川の源流というから驚きだ。

Eにカメラを預け、私は滔々と流れてくる清流に手を入れ顔を洗いその冷たさを楽しんだ。橋の右側は不思議なことに温泉水が流れ、硫黄の臭いが充満していて、四角い大型ケースを湯に浸し、売り物のゆで卵を作っている。Eと朴さんは観瀑亭まで行き戻って来た。長白瀑布観光のあとは、販売店に走りゆで卵とゆで唐黍を味わった。熱々の素朴な味に昼食前の胃袋は満足したのだった。韓国・朝鮮人にとっての聖地と書いたが、古来この地で暮らす人々にとっても長白山は聖地であった。清朝時代、満洲族の発祥の地とされ、1677年(清の康熙16年)と1776年(乾隆41年)の二度にわたり入山禁止令が出されたという。

満洲族(現、満族)、元々は黒水靺鞨族、後、女真族といい、ラマ教の文殊菩薩を深く信仰するところからマンジュリヤ・・・マンジュ族と自らを呼ぶようになった。長城を越え、紫禁城に入城したのは1644年、太祖ヌルハチから3代目、僅か7歳の順治帝を戴く愛新覚羅の英雄たちであった。

jīn shàng jiǎ
襟裳岬

歌詞: 岡本おさみ
中文詞: 林煌坤
作曲: 吉田拓郎

hǎibiān xiānqǐ làngāo
海邊掀起浪濤

jīdàng le wǒ de xīn
激蕩了我的心

jìde jiù zài hǎibiān
記得就在海邊

wǒ liǎ liúxià ài de wēn
我倆留下愛的吻

nàyàng měi yòu wēn xīn
那樣美又溫欣

rújīn zhǐyǒu wǒ yīgèrén
如今只有我一個人

mò mò dì zài zhuī xún
默默地 在追尋

zhuī xún wǎng shì
追尋往事

nà duàn huānlè shíguāng
那段歡樂時光

nà duàn měilì de mèng
那段美麗的夢

ài rén ài rén wǒ de ài rén
愛人愛人我的愛人

wǒ děng nǐ huílái sùshuō qíng huái
我等你回來訴說情懷

昨年は四川地震で大きな被害を受けた四姑娘山麓に住むギャロンチベット族の村の人達に多くのご援助を下さりありがとうございました。

当地では毎朝凍り付く日が続いていますが、村の人達は元気に過ごしております。これも日中文化交流市民サークル‘わんりい’、横断山脈研究会、神楽坂建築塾それにアメリカの有志の方々からお贈り頂いた電気毛布のお陰で、皆深く感謝申し上げます。

当地は間もなく長い春節(1月26日)の休みに入りますので、その前に地震復旧状況をご報告させていただきます。

地震の後、初めて改築された家が出て来て、お目出度いことだと皆喜んでいました。この家は2階部分や周辺の門や石垣が崩れましたが(写真の右後ろ側に元の家が見えます)、地震の前から改築する予定で工事の準備をしていましたので、速やかに改築できました。

しかし地震で観光客が殆ど来なかったため収入が激減してしまい、家の外見は立派になりましたが家計は苦しそうです。そのため改築したものの3階部分は内装できず、家具類も新しい家に不似合いな古ぼけた昔の物を使っています。

とはいえ、家に住めるのは恵まれた人達で、家が壊れて住めなくなり、道路際等の狭い場所に小屋掛けしてこの冬を越している村人が沢山います。長坪橋から少し奥へ入った小屋掛けが幾つも集まっている所があり、お婆さんが凍り付くような水で洗濯していました。みずぼらしい小屋掛けと、後方右手に見える地震の被害を殆ど受けなかった白い大きな鉄筋コンクリート建てのホテルが対症的です。

政府も色々援助していますが被災者が多いので一人一人には十分に援助できません。

注：村の民家が、鉄筋コンクリートの建物に比べ、地震に脆かったのは、石を泥で固めながら積んだだけの構造だからです。そのため村の人達は、地震後、改築する家は石をセメントで固めながら積みたと言っています。

政府の援助は個人に現金300元&米15kg/月、衣服、布団等。小屋掛けに一時金2000元。家の改築に供与20万円前後と貸し金2000元。他に道路や水道等の整備への援助も有ります。

村の人達の多くはこの春節で英気を養ってから地震で壊れた家の修復改築を始めますので、今年は忙しく物入りな日が続きます。改築した家の人も、この小屋掛けの集落に住む人達も、早く観光客が戻って来て仕事が増え、収入が元の水準に戻る事を願っています。

政府の援助も関わっていますが、長坪村に診療所(衛生站)を作る資金の目処がほぼ付きました。これも皆様のお陰です。前回の報告で、この診療所の建設予算は10万元強だと申し上げましたがこれは建物だけで、酸素吸入器を含む医療器具やベッド等の設備に6万元位掛かります。

しかし日本のNPO Earth Works Society や成都の旅行社が既に合計7万元をご寄付下さり、アメリカの基金も6.5万元の寄付を決めました。また政府も3万元位を援助する事になっています。

この診療所が建つ場所は地震直後に避難所の一つが置かれた場所で、以前お送りした事のある添付の写真の手

前にテントの屋根が見える所です。診療所は今年中に完工する予定です



地震後、初めて改築された家



小屋掛けの住居の前で洗濯する老婆



診療所の予定地(地震直後の写真)

話は変わりますが、成都から四姑娘山へのルートは未だ丹巴経由がメインです。パンダ保護育成基地のある臥龍を経由し二郎山を超えるルートの一部のトラックが行き交うようになりましたが、未だ道路状況が良くないため殆どの車両は丹巴と夾金山のルートを使っています。

特に旅客の安全を重視する公共バスは丹巴ルートを使う事が多いです。今年1月時点で、政府は3月末までに更に臥龍ルートを整備して小型車や公共バスも通れるようにすると言っていますので、期待しています。

なお私はこのご報告をさせて頂いた後、家族が居る丹巴へ行って暫く休養させて頂きます。皆様のご活躍を遠い中国のガンツォー・チベット族自治州からお祈り申し上げます。



【'わんりい' 活動報告】新年会▷シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)で新年を祝おう◁

2009年2月1日(日) 於：麻生市民館・料理室

今年も楽しい新年会でした。44名が集い、お鍋を囲んでほったたけを赤くし、シュワンヤンロウの、特製タレにからませた羊肉に舌鼓を打ちながら歓談しました。何人かの方がシュワンヤンロウ初体験でしたが、どなたもその美味しさに感動とこのことでした。

お腹がいっぱいになってもう食べられませんという方が何人も続くようになって余興タイム。

'わんりい'に中国の面白い物語をお寄せくださっている何媛媛さんによる中国箏の演奏、続いて'わんりい'「中国語で歌おう!会」の面々が習いたての「回家看看」と「長江之歌」。バリトン歌手として活躍の崔宗宝さんが何さんの箏に合わせて「荒城の月」を轟くような声量で朗々と歌ってくださると満場からアンコールの大拍手で、「千の風になって」そして「中国語で歌おう!会」講師の趙鳳英さんと「長江之歌」をデュエットの大サービスで会場が沸きました。

ご都合ですぐお帰りにならなければいけない京劇俳優の張紹成さんが、私にも3分くださいと言われ、精神性の高い中国拳法・意拳を気を含めて披露くださる一幕もあり、圧倒する迫力に皆固唾を呑んで見守りました。

何さん、趙鳳英さん、崔宗宝さんそして張紹成さん、それぞれ、余興というには申し訳ない本格的な技量を惜しみなく披露下さり'わんりい'として厚くお礼を申し上げたいと思います。

最後はビンゴとお笑い福引で和気藹々と気持ちよく笑い、最後は一本締めで終了しました。'わんりい'の'わ'は'和'の'輪'です。今年もまた手を取り合っいいい活動を目指しましょう!

(田井)



趙鳳英さんと一緒に「中国語で歌おう!会」の皆さんの歌が、「回家看看」と「長江之歌」を楽しく歌う



何媛媛さんの中国箏の伴奏で「荒城の月」を朗々と歌うバリトン歌手の崔宗宝さんに拍手が鳴り止まない

ドキュメンタリー映画「**長江にいきる**」乗愛(ビンアイ)の物語 監督☆フォン・イエン

■山形国際ドキュメンタリー映画祭2007 アジア千波万波部門 小川紳介賞(グランプリ)& コミュニティシネマ賞
 ■プント・デ・ヴィスタ2008 最優秀作品賞(グランプリ) ■香港国際映画祭2008 ドキュメンタリー優秀賞 ほか

山形国際ドキュメンタリー映画祭2007・「アジア千波万波」部門で、最高賞の小川紳介賞を獲得した中国映画「**稟愛(ビンアイ)**」が3月、渋谷のユーロスペースで3週間にわたるロングラン上映が決まった。

長江流域で進む三峡ダム建設で約113万人の人々が生まれ育った土地の水没を

前に移住を余儀なくされるといふ。多くは農民で、馮艶(フォン・イエン)監督は現地でそれらの人々の一人である農民女性・乗愛(ビンアイ)の家族と共に住み、その家族の生活の中心的女性・乗愛を7年にわたって追ったドキュメンタリー映画である。

監督と乗愛とは親密な関係を築き、長江の流れを背景に、乗愛はごく自然な表情でカメラを意識せずありのままの自分をみせる。立ち退きを求める政府の役人との激しい対立、土を耕しながら時おり漏らす不安。家族



や結婚を語る際の繊細な表情。乗愛の心の揺れをカメラは静かに見つめ、生まれ育った土地への深い慈しみを静かに愛情深くすくいあげる。

ここ数年の中国の経済の急成長に目を奪われてともしれば見落としてしまいそうな、中国内陸部農村の人々の厳しい現実を改めて知り

考えさせられる。そして逆境のなかで自分の生活を守るために理不尽な権力へ凜として抵抗する乗愛の姿は眩しい。

「結局は立ち退かざるを得なくなるのですが、流されることなく何事も自分で決め、生き抜こうとする姿には人間としての尊厳を感じました」とフォン監督。中国の、ごく普通の農民女性達の、自分の生活を人任せにしないで頑張る、芯の強さをこの映画でも改めて感じた。

(田井)

3/7(土)～3/27(金) 11:00/13:30/16:00/18:30 於:渋谷ユーロスペース(渋谷区円山町1-5 ☎03-3461-0211)
 特別鑑賞券:1400円(発売中) 当日:一般1700円 大学・専門学生1400円 <http://www.bingai.net/index.htm>

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。3月いっぱい、おたより会費の納入をよろしくお願いします。

年会費:1500円 入会金なし

郵便局振替口座:0180-5-134011‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ:042-734-5100 (事務局)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

盛装したギャロンの家族 (表紙写真の説明)

お祭や結婚式の時に、このように盛装します。ギャロンと言っても色々な部族が居て、この家族は西部の比較的標高が高い地域に住んでいる部族です。

この地域には放牧を主な生業にするアムド系の部族が入り込んでいて、この家族の生活や風俗もその影響を受けています。この写真の女性の衣装が典型的なギャロンの女性の衣装とは異質な感じを受けるのはそのためです。

(大川健三)

【3月の定例会とおたより発送日】 — どなたでもどうぞお出掛けください。

- 定例会:3月21日(土) 15:00～ 三輪センター・第二会議室
- おたより発送日:3月27日(金) 13:30～ 田井宅

【TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル コンサート】

2009年3月30日(月) 19:00(18:30開場)

於：新宿文化センター 小ホール

前売り2500円 (当日券3000円)

問合せ：E-mail：manba@hotmail.co.jp

☎ 042-498-4820(永瀬)

2006年、2007年とすでに2回、馬頭琴の本場である内モンゴルでコンサートを行いました。その折、外国人馬頭琴アンサンブルとして最高の評価を頂いたTOKYO万馬-馬頭琴アンサンブルを地元の内モンゴルテレビ台(テレビ局)が音楽番組で放映することになりました。

今年5月、内モンゴルで3度目の演奏を行うことが既に決定し、そのコンサートの模様と併せて日本での練習や演奏などの活動も放映することになりました。その取材の一環として今回のコンサートが開催され、コンサートの撮影のために、内モンゴルよりテレビ局のスタッフが来日いたします。是非皆様のご来場とご声援を頂きますよう心から願っております。よろしくお祈りいたします。

(TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル・代表 永瀬)



音楽を日本友好の架け橋に バリトン・崔宗宝リサイタル

～日本・中国二つの故郷を唱う！
日本全国100公演第4回～

平城山 城ヶ島の雨 出船 荒城の月 九十九里浜
万里の長城 長江への流れ 紅彩妹妹 等など

出演：崔宗宝(バリトン) 木曾真奈美(ピアノ)

海老名市文化会館・小ホール

2009年3月18日(水) 19:00(開場18:30)

3000円 全席自由席 <http://lbn.cc/sai-soho/html/fan.html>

崔宗宝音楽事務所 ☎ 046-232-6065

◆ ‘わんりい’ 会員及び関係者の皆様は、会員割引があります ‘わんりい’ ☎042-734-5100 へご連絡を！

《ブラダン・コチ チャリティーコンサート》

ふるさと ～プラハの春～

お話：鎌田實「命・環境・平和を語る」

音楽：ブラダン・コチ(チェロ) 有吉英奈(ピアノ)

2009年3月13日 1回 午後2時～

2回 午後7時～

於：津田ホール(津田塾大学内 千駄ヶ谷キャンパス)

チケット代 3000円(全席指定)

主催・問合せ：日本チェルノブイリ連帯基金

☎0263-46-4218

<http://www.jca.apc.org/jcf/home.html>

「詩人の恋」そして恋の歌・愛の歌

バリトン・薄宏リサイタル

シューマンの「詩人の恋」全曲及びラ・クンパルシータ
忘れな草 闘牛士の歌などなど、世界の恋の歌・愛の歌

出演：薄宏(バリトン) 今井頭(ピアノ)

於：王子ホール ●地下鉄銀座駅下車A12出口から徒歩1分

2009年3月20日(祝) 14:00(開場13:30)

前売4000円 当日4500円

主催：亜宏企画 企画：薄宏

問合せ：03-3715-7191(音楽園)

<http://www.geocities.jp/hakuhiroshi2000/>



スリランカ料理と講演会

～スリランカ料理を通して国際理解を、
講演を通してこの国の事情を知ろう～

於：町田市民フォーラム

2009年3月15日(日) 14:00～18:30

参加費：1500円(定員30名)

◆料理：3F調理室

スリランカ・カレー3種類と紅茶

◆講演会：町田国際交流センター・講習室

講師：トゥンガ・ランディニエ(NEC勤務)

申込み：3月6日(金)

●用紙に「スリランカ料理と講演会」申込み書と書き、
氏名及び電話番号、参加人数を書いてファックスする。

FAX番号：042-722-5330

町田国際交流センター(国際協力部会)